この雛形（ひながた）に作品を上書きしてください。字体や大きさは変更しないで下さい。作品が完成したら、この「この雛形～ください。」までの文章二行は消去してください。

名前　○○○　○○○　１５年後のプロフィール

|  |  |
| --- | --- |
| 名前　年齢 | ○○○　○○（ふりがな）　32歳　　男 |
| 職　業 | 地方公務員 | 木城町役場　まちづくり推進課　勤務 |
| 家族構成 | 妻と1歳半の子供　妻は小学校の教師　木城町内に住む |
| 仕事の魅力 | 木城町は人口5100人ちょっとの宮崎県の中央に位置する山間の町。小丸川のいくつかの支流を囲むようにある山里。役場に勤めるようになって５年が経った。２年前、希望していた「まちづくり推進課」に配属される。2017年，観光協会と一緒になって木城の特産品を使った新しい鍋料理の開発にチャレンジ。特産の生姜（しょうが）を使った「木城黄金生姜鍋」を開発し、2017年に実施された「第10回西都児湯鍋合戦」に参加。木城町としてはじめて優勝した。木城の魅力を全国に発信し、より幸せなまちづくりのために、木城町に住む人たちとがんばっていきたい。 |
| 趣　味 | ロッククライミング　カヌー　　木城にはカヌーで遊べる清流がたくさん！ |
| 経　歴 | 宮崎西高卒業後一浪して宮崎大学農学部に進学。大学では，森林緑地環境科学科で森林経済学を学び，同大学院に進学。宮崎の森林経済学に関する論文で修士号を取得。大学院博士課程在籍中に木城町役場に採用され現在に至る。 |

毎日新聞　2018・３・８

オピニオンopinion　記者の目　大迫麻記子　東京社会部

「共感力」高めて再挑戦を

「下町ボブスレー」五輪出場ならず

東京都大田区の町工場経営者らが集まって五輪出場を目指す「下町ボブスレープロジェクト」。平昌冬季五輪で「下町ソリ」を使う契約を結んだジャマイカチームは、最終的にラトビアのBTC 社製ソリを使った。

なぜ下町ソリは採用されなかったのか。ジャマイカチームは走行テストでBTC社製より２秒遅かったことを理由の一つに挙げたが、2台の条件が違いすぎ、正確な比較だったとは思わない。だが、差はあった。取材で見えてきたのは、ソリを製作する力ではなく、ものづくり志向を超えた、乗り手への「共感力」の差だ。五輪を前に、１００分の１秒を縮めようと戦う選手やコーチに信頼してもらえなかったことが、残念な結果を招いた要因ではないか。

「使う側の意見を聞こうとしない」

「大田区の皆さんのクラフトマンシップ（職人技・魂）は素晴らしい」。昨年4月に来日したジャマイカチームのジャスミン・フェンレイタービクトリアン選手は、下町ソリの性能を評価した。12月に行われた外国製ソリとの比較テストでも、タイムは互角だった。しかし不採用――。これは2014年ソチ五輪の時と似たパターンだ。「共にソチを目指そう」と協定を結び、下町ソリを評価していた日本チームが五輪で乗ったのも、今回と同じBTC社製だった。

こんなエピソードがある。ソチ五輪の3か月前、下町ソリは日本チームから27項目もの改善要求を受けた。その一つに、「フレーム（ハンドルなどが付く骨組み）の色を赤ではなく黒にしてほしい」というものがあった。下町の関係者は「赤は情熱を表現した色。色はソリの性能に関係ないので、変える必要はないと思った」と振り返る。

だが、日本チームの関係者が明かす。「新しいソリができると、他のチームはボディの中を（我々の）横からのぞいて構造をチェックする。まねをされたくないので（フレームが）目立たないようにボディと同じ黒にしてほしかった。何度か言ったが直してもらえなかった」。別の関係者のことば.は痛烈だ。「下町の皆さんは技術に自信がある分、使う側の意見を積極的に聞こうという姿勢がなかった」

目標に食い違い話し合い足らず

15年11月の例も示唆に富む。平昌を目指していた日本チームはドイツで比較テストをした。下町ソリとドイツのシンガー社製を滑走させ、1日目のタイムは同等。すると、社長とともに現地に来ていたシンガー社の技術者が自社のソリを分解し始め、重りを積むなど組み直した。翌日のテストでシンガー社製は1秒も先行した。ソリはコースや選手の特性に合わせた調整で滑りが変わる。一から組み直せばなおさらだ。日本チームの関係者は「そりをバラバラにして組み直した時、『そこまでするか』と驚いた」と話す。採用されたのはシンガー社製だった。

そして、平昌五輪の4か月前の17年10月。下町がジャマイカチームに引き渡したソリは、規則違反を指定された。ソリには形状や重さなどの細かな国際規則があり、国際審判のチェックをクリアしなければ使えない。五輪出場のかかった試合を目前に控えていたジャマイカ側からは「このままでは五輪を棒に振る」と厳しい声が上がったという。

下町側は反論する。設計はジャマイカ側の希望でチームの技術指導者が手がけた。より小型のソリを目指したため、ボディの幅などが規則ぎりぎりの設計だった。契約では、ソリを引き渡した後の責任はジャマイカ側が取ることになっていた、と。

だが、場合によっては規則違反を指摘される恐れがあると分かっていたともいう。そうであれば「後で修正すればいい」という姿勢ではなく、リスクについてきちんと話し合い, 対処法も詰めてからソリを引き渡すべきだった。この出来事がジャマイカチームを不安にさせ、ジャマイカは結局、BTC社製を選んだ。

日本の元選手は「BTCのソリは氷にランナー（刃）が食い込む。安定感が抜群で規則違反のリスクもない」と話し、下町ソリは「素材はいいし作りも丁寧。だが、氷の上でソリがズレる感じがあって操縦しにくい」と評した。BTCは小さな工房だがボブスレーの関係者が関わる。元選手は「操縦しやすいし、調整もしやすい。経験者が作っているので乗り手の気持ちが分かっている」と付け加えた。

そもそも、下町プロジェクトは「大田区のものづくり技術を五輪でアピールし、世界から仕事を獲得する」狙いで始まった。一方、選手にとって重要なのは、言うまでもなく大会で結果を出すことだ。

意見が食い違うときは徹底的に話し合う。比較テストなど重要な局面では、ベストな状態で走れるようにそりを調整する。規則違反のリスクがあるなら、付きっきりで修正できる体制を組んで安心させる。こうした点で、下町は選手の気持ちにどこまで寄り添えていたのか。ライバルに後れを取っていなかったか。

下町プロジェクトの今後は未定という。だが、ソリの性能が劣っていたわけでは決してない。挑戦を通して課題が見えてきたからこそ、22年北京五輪のコースを滑走する下町ソリを見たい。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　２０１８・３・８

日本経済新聞　2018・３・８

ぷりずむ

サバで漁業活性化

地域一丸で新商品開発

　3月8日は「サバの日」だ。日本は世界で最もサバ類の漁獲量が多い。世界的に水揚げが減る水産物が目立つ中、消費者にも水産業界にとっても貴重な水産資源だ。生きたまま出荷したり、地域が一丸で新商品を開発したりと、付加価値を高める動きも出てきた。

　全国漁業協同組合連合会（東京・千代田）は7日、魚の価値向上を図る「浜の活力再生プラン」の優良事例の初の表彰式を開いた。目立ったのがサバの商品価値を高める取り組みだ。

　高知県のブランドサバ「土佐の清水さば」は農林水産大臣賞を受賞した。関東には空輸、関西には専用車でぴちぴちの活魚のまま出荷する。

　漁師は深夜に出漁し、水揚げ後も絡まった網を直しエサを付ける。負担軽減のため引退した漁師が漁具の修繕を一部担う。出漁機会の増加だけでなく「技術の伝承につながっている」（県漁協清水統括支所）。

　静岡の小川漁協（焼津市）は漁協、漁師、地域の飲食店ら全サバ関係者が知恵を出し合い加工品を開発する。「サバパワーを丸ごと、手軽に」をコンセプトとした「さばチキン」は水産庁長官賞を受賞した。骨がなく解凍しすぐ食べられる。昨年の6割増しに当たる５千個の販売を目指す。

　水産業の経営環境は高齢化や漁獲量の減少など厳しさが増す。浜の活性化に最も重要なのは「地域が一緒になって取り組むこと」（全漁連の長屋信博代表理事専務）。知恵と工夫が産地の新たな活路につながる。

（た）

ボブスレーとサバ

―３月８日の新聞を読んで―

○○○　○○○

平昌（ピョンチャン）オリンピックでは，日本選手の活躍とともに多くの話題がお茶の間をにぎわした。その中の一つに，東京下町の町工場が一致団結して作った「下町ボブスレー」が，ジャマイカチーム側の契約破棄で結局使われずに終わった，という話題がある。3月8日の毎日新聞「記者の目」には、なぜ五輪出場がかなわなかったのかについて，大迫麻記子記者が追加記事を書いている。

記事によると，日本チームも2014年のソチオリンピックの時に，この「下町ソリ」を採用するかどうかという話になったそうである。当時日本チームは，ソチ五輪の3か月前に「下町ソリ」に27項目もの改善要求を出している。しかし，その中には積極的に改善されなかった項目もあったという。記事では，日本チームの関係者の話として「下町の皆さんは技術に自信がある分，使う側の意見を積極的に聞こうという姿勢がなかった。」（同記事より）という辛辣な意見が掲載されている。その改善されなかった一例が書かれてあるのだが、それが作り手と使う側とのギャップを示していておもしろい。引用しよう。

「（改善項目の一つに）『フレーム（ハンドルなどが付く骨組み）の色を赤ではなく黒にしてほしい』というものがあった。下町の関係者は『赤は情熱を表現した色。色はソリの性能に関係ないので，変える必要はないと思った。』と振り返る。だが日本チームの関係者が明かす。『新しいソリができると，他のチームはボディの中を（我々の）横からのぞいて構造をチェックする。まねをされたくないので（フレームが）目立たないようにボディと同じ黒にしてほしかった。何度か言ったが直してもらえなかった』。」（同記事より）

当記者はこういった話に加え，海外のソリメーカーとの対応の差を例に出しながら、下町チームの「共感力」のなさが今回の失敗をまねいたと分析している。作り手の論理だけで進め、利用者側の意見を聞かないと大きな失敗を招くことになる，というのである。

それでは「共感力」さえ高めれば次のオリンピックで採用されるのだろうか。私は，そこにはもっと大きな技術的壁があると考えている。記事によると，ジャマイカチームが最終的に選んだのはラトビアのBCT社製であった。日本チームと同じものだ。このソリは日本の元選手が言うように「BTCのソリは氷にランナー（刃）が食い込む。安定性が抜群で規則違反のリスクもない。」（同記事より）のである。比べて日本製は「素材はいいし作りも丁寧。だが，氷の上でソリがズレる感じがあって操縦しにくい。」（同選手談）という。まさにソリ製作において、決定的な技術力の差がある。

我々は、東京下町の町工場というと「小さい工場が集まっているが、その技術は世界トップレベル」という幻想を抱いているのではないだろうか。現実には「下町ボブスレー」の技術は世界水準に達していないのである。改善要求を，技術を使って乗り越える力がまだないのである。

「共感力」は裏打ちされた技術力が生み出すものではないだろうか。さらに言えば，「共感力」と「技術力」は表裏一体なのである。

一方，おなじ3月8日の日経（日本経済新聞）では，「ぷりずむ」と書かれた短い囲み記事が目を引いた。

そこには「サバで漁業活性化」「地域一丸で新商品開発」というタイトルが書かれてある。初めて知ったのだが，「日本は世界で最もサバ類の漁獲量が多い。」（同記事より）そうである。全国漁協協同組合連合会は「浜の活力再生プラン」として優良事例を選出し，初の表彰を行った。名誉ある初代の農林水産大臣賞に輝いたのは「土佐の清水さば」であった。高知（土佐）の清水漁港一帯では、漁師は深夜に漁に出てサバをとる。船が帰ってきて水揚げをすると、すぐにサバを生きたまま東京や関西に空輸や専用車で届ける。サバを水揚げしたあとは、地域の引退した漁師の力も借りて、網の修理と餌付けをおこない、再び船は漁にでる。こうやって出漁機会を増加しつつ、年寄の漁師からの技術伝承も行えるようになっているという。まさに，地域一丸で「土佐の清水さば」のブランドをつくりあげている。なんとこの記事が掲載された3月8日は「サバの日」なんだそうである。日経のしゃれたセンスを感じた。

ここでも「地域一丸」となる「共感力」が必要だということかもしれない。しかし，一番の技術的なブレークスルーは，あのすぐ傷んでしまうサバを，生きたまま東京や関西に輸送する技術が確立したことにあるのではないだろうか。その技術開発についてはこの記事はどこにも触れていない。その技術が確立されたからこそ，「地域一丸」となったのではないか。

私は地方の小さな自治体で，まちづくりに携わっている。木城という「新しき村」や「石井十次」そして「絵本の里」を生んだ，人の幸せを求める山間の町で，何が未来の木城をつくるブレークスルーになるのだろうか。改めて自分の仕事について考えさせられた３月８日、サバの日であった。